

# 社会人経験のある看護師が職業継続の決意をするプロセス

## Process Nurse with Other Work Experience Decides to Continue Working as a Nurse

舟橋 陽子

Yoko FUNAHASHI

(神奈川歯科大学短期大学部 看護学科)

キーワード：看護師 社会人経験 職業継続 キャリア形成

### I. はじめに

厚生労働省によると、1991年以降我が国は不動産バブルの崩壊に端を発して経済状況が悪化し、以後約20年にわたり低迷し続けた。景気後退に加え、大卒者の増加により新規高卒者の求人が激減した。完全失業率は2010年に5%を超えた<sup>1)</sup>。そのような社会状況の中で、一度社会に出て働いたが、国家資格を取得し専門職につくという選択をする社会人が増えてきた。奥はそのような社会状況の中で自分の将来を考える若者が安定した職業として看護師資格を目指すようになっていくと述べている<sup>2)</sup>。

2013年より完全失業率は改善傾向にあり、2017年に2.8%と2%台まで改善し2018年と2019年には2.4%となった。2017年から2019年の看護系の学校の入学者は2017年には276940人(うち25歳～34歳30670人)、2018年には279630人(うち25歳～34歳24650人)、2019年には270640人(うち25～34歳18540人)のように推移している<sup>3)</sup>。看護系の学校への入学者数は270000人前後で推移している一方、社会人経験者と推測される25～34歳の入学者は2017年を機に著明に減少している。25～34歳の看護系の学校への入学希望は国家の経済状態に影響を受けているといえる。しかし、2020年はCOVID-19による経済の停滞により完全失業率は6月には2.8%、9月には3.0%と再び悪化傾向にある<sup>4)</sup>。過去の例によると、社会人経験者が再び国家資格を目指して看護系の学校を目指すことが予測されるが、連日医療の現場の厳しい労働状況がマスコミ等を通して伝えられており、実際に社会的経験のある看護師志望者が増加するかは不透明であるといえる。

厚生労働省による第7次看護職員需給見通しに関する検討会報告書には、「多様な社会経験を有する者にとっ

ても、看護師学校、養成所を経て看護職員となることが魅力的な選択となるよう、就学支援等の強化を図っていくべきである<sup>1)5)</sup>とある。さらに、厚生労働省は2015年に社会人経験者の受け入れ・支援のための指針を出している<sup>6)</sup>。これらのことから、厚生労働省は超高齢少子化社会において看護師の需要は高まることを遅くとも2012年には予測している。そして、少子化の中で新たに看護師を育成するにあたり、その対象を社会人経験のある者にしていたことがわかる。さらに、厚生労働省は団塊の世代が75歳を迎える2025年問題に象徴される超少子高齢化に対応するには、看護師の需要は約200万人と試算している<sup>7)</sup>。日本看護協会の統計によると、現在の看護師数は約166万人であり、さらに約40万人の看護師の増加が必要である<sup>8)</sup>。

しかし、寺岡ら<sup>9)</sup>や米田<sup>10)</sup>によると、資格を取得した後、社会人経験をもたない新人看護師の離職率はある病院では約10.9～12.7%に対し、社会人経験がある新人看護師の離職率は約15.9～19.4%と高い現状があることを指摘している。看護師不足の一助にと期待されている社会人経験のある看護師が経験を積み上げながら、長く働くことが期待されているにもかかわらず、離職する者が多い現状がある。そこで、離職せず職業継続できている社会人経験のある看護師の職業適応までのプロセスを辿ることにより、社会人経験のある看護師のキャリア形成の支援の一助となりうると考える。

### II. 研究目的

本研究の目的は社会人経験のある看護師が職業継続の決意をするプロセスを明らかにすることである。

### III. 本研究の意義

1. 離職せず職業継続できている社会人経験のある看護師の職業適応までのプロセスを辿ることにより、今

後の社会人経験のある看護師の就労継続できるよう支援することができる可能性がある。

2. 社会人経験のある看護師のキャリア形成への援助の資料の一助となる可能性がある。
3. 看護職の生涯発達の一助となる可能性がある。

#### IV. 用語の説明

##### 1. 社会人経験のある看護師

看護職以外の就業経験のある看護師

##### 2. 新人看護師

看護基礎教育を修了し、国家試験に合格して免許を取得し、病院に就職した後1年以内の看護師

##### 3. 看護職のキャリア

全ての看護職が豊かな人生を歩むことを大切にしながら、「人を気遣い世話をする」<sup>11)</sup> 専門職として生涯をかけて学修し、実践し思考し続けることによって看護職として経験を積むこと

#### V. 研究の対象者と除外基準

##### 1. 本研究協力者は、以下の条件を満たすものとした。

- 1) 過去に社会人経験を1年以上持ち、5年以上勤務している看護師

真壁は就業経験5年目までの看護師は仕事に対する負担感が大きいと述べている<sup>12)</sup>。そのため、5年目以上なら経験や体験を言語化できると考えられるため、選択基準を就業5年目以上とした。

- 2) 役職は問わない

- 3) 本研究の参加にあたり、文書および口頭で十分な説明を受けた後、理解のうえ、本人の自由意志による同意が得られた者

##### 2. 研究協力者の除外基準

前職が正規雇用ではなかった者。

高野らは社会人経験がある看護師は「実力をつけ、長く働き、後輩のために職場環境を変えていきたい、これからの職場内の人間関係や組織づくりを考えている。」と報告している<sup>13)</sup>。前職が正規雇用でなかった者は、職場への帰属意識が希薄であると考え除外した。

#### VI. 研究方法

##### 1. 期間

東京女子医科大学倫理委員会(2018年5月1日受理【承認番号】4771) および、東京女子医科大学看護学研究科修士論文研究計画審査承認後から、2018年10月2日までであった。

##### 2. データ収集方法

本研究はネットワークサンプリングでの研究協力者の

選定、決定を行った。

研究協力者と相談し、面接日時・場所の設定を行い、看護師としての職業継続について半構成的面接を一人60分程度実施した。インタビュー内容は研究協力者の同意を得た上で電子媒体に録音し、研究者が逐語録に起こした。

##### 3. データの分析

本研究の目的は社会人経験のある看護師が職業適継続の決意をするプロセスを明らかにし、今後同様の背景をもつ看護師への支援のあり方を考えるものである。修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチは意義が確認された問題についての“うごき(変化・プロセス)”であることをはっきりさせる研究である。研究協力者の語りの文脈を活かしながらカテゴリー化することで、そこにある文脈を解釈することができる“修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(Modified Grounded Theory Approach)<sup>14)</sup>”の手法を用いて分析した。

##### 4. データ及び分析の真実性の確保

情報収集の際は研究協力者の言葉や反応を大切にし、研究協力者の話した内容を、正確に記述するようデータ化するには心がけた。

分析の段階では、研究協力者の話した内容がゆがめられないように、また恣意的な解釈とならないように、質的研究を熟知している研究者と共に繰り返し検討した。分析の一連の過程において、指導者よりスーパーバイズを受けて行った。

##### 5. 倫理的配慮

倫理委員会で承認の得られた同意説明文書を研究協力者に渡し、文書および口頭による十分な説明を行い、研究協力者の自由意志による同意を文書で取得した。同意説明文書には、以下の内容を含むものとした。

- 1) 研究への参加は任意であること、同意しなくても不利益を受けないこと、同意は撤回できること
- 2) 研究全ての過程において匿名性を維持し、個人情報保持すること
- 3) 得られたデータは研究以外の目的には使用しないこと
- 4) 本研究の学術的な意義について
- 5) 学術的な場での公表(論文・学会発表)は匿名化し、個人が特定されないよう配慮すること
- 6) 研究により得られた記録の取り扱いは、USBメモリーを鍵のかかる場所に保管すること
- 7) データは分析が終了し、論文投稿を終えた時点でUSBメモリーを破砕し、破棄すること
- 8) 研究の進み具合やその成果は個人の求めに応じ分か

りやすい形で説明をすること

## Ⅶ. 結果

### 1. 研究協力者の概要

社会人経験が1年以上あり、5年以上勤務している看護師8名を対象とした。年齢は40～50代であり、性別は女性7名、男性1名であった。研究協力者の社会人経験は5～20年（平均10.6年）、看護師経験年数は7～21年（平均14.1年）であった。1名を除きプリセプターシップによる教育、1名は病棟全体での教育を受けていた。

### 2. 分析テーマ

社会人経験のある看護師が職業継続の決意をするプロセス

### 3. 分析焦点者

社会人経験が1年以上ある就業5年以上の看護師

### 4. 分析起点と終点の設定

起点：社会人経験のある看護師が就職した時

終点：社会人経験のある看護師が職業継続の決意をするプロセスが明らかになった時

### 5. ストーリーライン

コアカテゴリーを【 】, カテゴリーを[ ], 概念を< >, 太字で表す。

社会人経験のある看護師が職業継続の決意をするプロセスは25概念から[看護師として働くことへの期待]、[看護師になったことによる心身の疲弊]、[看護師として仕事をする上での工夫]、[患者との関わりを通して見えてきた看護の面白さ]、[看護に社会人の経験を生かせる強み]、[看護師に転職したことへの自己肯定感]という6つのカテゴリーが生成され、【社会人経験がある看護師

表1 研究協力者の概要

	年齢	社会人経験	看護師経験
A	50代	5年	20年
B	40代	5年	9年
C	40代	10年	12年
D	50代	10年	17年
E	40代	2年	8年
F	50代	20年	7年
G	50代	7年	21年
H	50代	11年	19年

としての意義の自覚】という1つのコアカテゴリーに収束した。

分析結果から得られたコアカテゴリー、カテゴリーを用いて図1に結果図として示した。

a. 社会人経験がある看護師は<自分が看護された経験や人のためになる仕事をしたいと考えて看護師に転職した>。就職時は<看護師としては新人だという姿勢を持つ(つ)>っており、教えてもらう立場であることを認識していた。社会人経験者は[看護師として働くことへの期待]をもち就業を開始する。しかし、現役で看護師になった者よりは年齢が高く<肉体的には厳しかった>上に、<年下の先輩に説明なき指導を受けた>り、<男性看護師ということだけで受け入れてもらえなかった>という体験を経て、これまで持っていた看護師の<イメージとのギャップを感じる>。そして、<看護師を辞めたいけど資格は生かしたい>という葛藤をもち、[看護師になったことによる心身の疲弊]を感じる。しかし、<気分転換できる方法(がある)>の支援を得たり、<なぜ転職して看護師になったのか内省(する)>したりして<認めてもらえない悔しさを仕事で見返す>ために[看護師として仕事をする上での工夫]をしながら職業を継続する。さらに、[看護師として仕事をする上での工夫]ができることもbで述べる[看護に社会人の経験を生かせる強み]のひとつである。

b. [看護師になったことによる心身の疲弊]を感じていた段階を乗り越えた社会人経験のある看護師は、次に[患者との関わりを通して見えてきた看護の面白さ]を理解し、[看護に社会人の経験を生かせる強み]を発揮する段階へと移行する。[患者との関わりを通して見えてきた看護の面白さ]を感じるには、<先輩のサポートによる成功体験>や<ロールモデルとの出会い>がある。そして、<看護師として自立する>ようになり、<患者の回復を喜ぶことができ(る)>、<患者と向き合えることが楽しいと思える>ようになる。社会人経験のある看護師の特徴として、[患者との関わりを通して見えてきた看護の面白さ]を感じる余裕が出てくると<入院による患者の焦りが理解できる>などの[看護に社会人の経験を生かせる強み]を発揮する。そして、[看護師に転職したことへの自己肯定感]を持つ。これらは社会人経験のある看護師が【社会人経験がある看護師としての意義の自覚】をするまでの過程で強みとして作用する。aとbのプロセスは個人差はあるが可逆的であり、プロセスに要する時間も違う。

c. [看護師に転職したことへの自己肯定感]を感じる

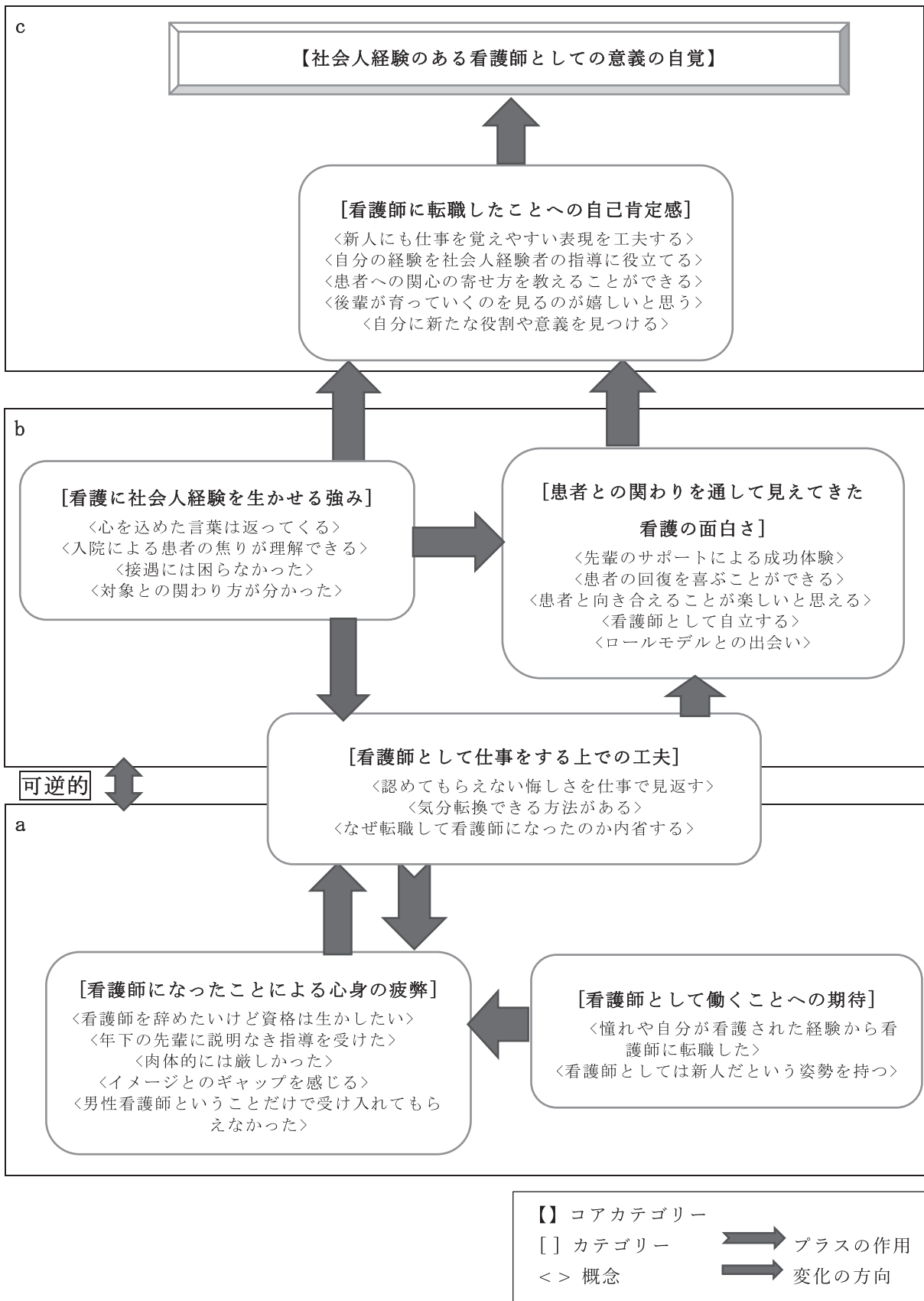


図 1 結果図



頃には後輩看護師の育成に関わるようになる。<新人にも仕事を覚えやすい表現を工夫(する)>し、<患者への関心の寄せ方を教えることができる>ようになる。なかでも社会人経験のある看護師は<自分の体験を社会人経験者の指導に役立て(る)>ていた。そして、<後輩が育っていくのを見るのが嬉しいと思う>ようになり、【社会人経験がある看護師としての意義の自覚】をするという経過を辿る。

【社会人経験がある看護師としての意義の自覚】とは、社会人経験で培った強みを看護に生かすことができ、かつ、社会人経験のない看護師も社会人経験のある看護師もそれぞれに合った方法で育成をするという自己の役割の意義を強みとして自覚することをいう。

## VIII. 概念とカテゴリー

代表的なヴァリエーション(具体例)は以下のようなのがあり斜体で表す。カテゴリーを[ ]、概念を<>太字で表す。

1 [看護師として働くことへの期待]は<自分が看護された経験や人の為になる仕事をしたいと考えて看護師に転職した>、<看護師としては新人だという姿勢を持つ>の2つの概念から成り立っていた。

1) <自分が看護された経験や人の為になる仕事をしたいと考えて看護師に転職した>とは看護師への転職を目指したきっかけである。

「自分が子どもを出産した時で、医療事故にあって、救命センターに運ばれて、でまあ九死に一生を得るような体験をした時に、出会った助産師さんが素晴らしかったんですね。」「自分の収入が少ないと思っても、もっと少ない人もいるんだろうと感じて。そのありがたい環境を使って他人に還元したいって思うようになって。」

2) <看護師としては新人だという姿勢を持つ>とは社会人経験があっても看護師の経験は1年目と自覚し、真摯に学ぶ姿勢を持っていることである。

「私、新人の頃のプリセプターは7歳年下だったんです。人によるのかもしれないけど私は年下でも、もう先輩だったから全部敬語で話してた。」「社会人経験があったとしても看護師としては1年目。まだ全然経験がないから、学ぶ姿勢とか、年下の先輩に色々言われることはあるけど、それにいちいち反応してても仕方ない。」

2. [看護師になったことによる心身の疲弊]とは謙虚な姿勢で新たな仕事に臨んだにも関わらず、心身共につらい思いをしたことである。<看護師を辞めたいけど資格は生かしたい>、<年下の先輩に説明なき指導を受けた>、<肉体的には厳しかった>、<イメージと

のギャップを感じる>、<男性看護師ということだけで受け入れてもらえなかった>の5つの概念から成り立っていた。

1) <看護師を辞めたいけど資格は生かしたい>とは、人間関係や仕事の大変さがあり辞めたいと思うけど、看護師資格は生かしたい気持ちがあったことを表している。

「私も他の職考えようかなあって思うことはやっぱりあった。最近自分で思ったのが、30になると面接で『あなたの武器はなんですか?』って。職って選べない。」「現場も社会人経験のある看護師を受け入れるって抵抗あるし、人間だから、違和感感じて嫌いだとか。転職してよかったのか悩みました。」

2) <年下の先輩に説明なき指導を受けた>とは、社会人経験があっても常識とか若い看護師よりあるのに認めてもらえず自尊心を傷つけられたことを表している。

「私30過ぎて看護師になって、すごい年下の看護師にすごい上から目線で教わるんですけど、マニュアルもなく体で覚えろみたいな、社会人としてのいろいろな自分の経験を持っているのに、常識とか若い子よりあるのにその上から目線みたいな洗礼があって。」「指導が厳しいというか、正直にいうといじめに近い感じだったかなと思います。」

3) <肉体的には厳しかった>とは、社会人経験をした後看護師になって20代の看護師と同様に働くのは大変だった状態を表している。

「毎日限界でしたね。20代の子と一緒に働いて、同じ仕事量で、で年休ももらえないじゃないですか。4週7休で夜勤も入れているので、残業も当たり前だし、まあ、日々限界。」「ほんとに人がいないときに夜中の3時まで仕事して家に帰って仮眠して次の日勤、みたいなそれが3日続くともう顔が引きつっちゃう。」

4) <イメージとのギャップを感じる>とは、社会人を経験した看護師は看護の世界を独特だと思っているということである。

「やっぱり看護の世界独特の雰囲気というか、一般企業とは違う。」「リアリティショックはありましたね。入学前や、学校にいたときにはわからなかった看護の世界の何ていうか、イメージが違うというか。」「いざ看護師になって蓋を開けて見たら汚いこともしなきゃならないし、重労働だし、怒られるし、人付き合いなんていったらほんと大変じゃないですか。患者ともそうだし、家族ともそうだし、多職種イメージとの違いを感じていた。」

5) <男性看護師ということだけで受け入れてもらえなかった>とは、社会人経験者に対する独特の視線

がある上に、男性看護師を認めない看護師もいたことを表している。

「最初にいた病院なんかだと、病棟に男一人。で、今でも男性看護師を認められない人もいますよね。そういう人に真っ向から存在を否定されるというのはちょっときつかったですね。認めてもらえないというか。」

3. [看護師をする上での工夫]とは、看護師として仕事をする上でつらいことがあるが、それをコントロールするための工夫をしながら働いている状態を表している。

1) <認めてもらえない悔しさを仕事で見返す>とは年齢や性差で悔しい思いをするが、仕事をきちんとすることで認めてもらう努力をしている状態を表す。

「気が強かったのかな、自分も。逆にエネルギーにしちゃう。そういうキャラクターもあるのかもしれない。次は完璧にやってやるみたいな。」「辞めようとは思わなかったですね。むしろ見返してやろうと思ってましたね。」

2) <気分転換できる方法がある>とは、看護から離れることができる趣味や助けになる家族と気分転換しながら仕事をしていた状態を表している。

「家に帰れば家族がいるし。リフレッシュはするようにしてました。土日は仕事を入れないようにしてました。」「私、芝居もやっているんですね。で、稽古日の休み希望はなるべく通してもらってました。」「旅行したり、仕事の帰りにヨガに通ったりしてました。」

3) <なぜ転職して看護師になったのか内省する>とは、看護師を辞めたいと思った時に、なぜ看護師になろうと思ったのか振り返り、考えることを表している。

「将来を考えたときに、一人で生きていけるのかとかいっぱい考えたときに、この収入で働くと、もうちょっとステップアップしなければという感じがあった。」「15年間専業主婦でちょっと動いてみようかなって思ったんですね。」「年齢もありましたし、あと、自分の将来、どんな感じで仕事してるんだろうっていろんなイメージをしました。」

4. [患者との関わりを通して見えてきた看護の面白さ]とは[看護師になったことによる心身の疲弊]後、ロールモデルとの出会いをはじめ、看護師に魅力を感じたことである。<先輩のサポートによる成功体験>、<患者の回復を喜ぶことができる>、<患者と向き合えることが楽しいと思える>、<看護師として自立す

る>、<ロールモデルとの出会い>の5つの概念から成り立っていた。

1) <先輩のサポートによる成功体験>とは、仕事を認められるように努力した結果、先輩のサポートが受けられるようになったことを表している。

「先輩のサポートもね、年下の先輩のサポート。技術の高い先輩と歳はいつてるけど看護師としては全然未熟な1年生だけど、先輩のサポート受けながらケアして、それが成功していくとか。」「みんなで一致団結して一人の患者さんに対してみんなで考えて看護師して、ちゃんと結果が出たときとかすごいいい仕事だなんて思いました。」

2) <患者の回復を喜ぶことができる>とは、看護師は主役ではなく、患者の闘病をサポートするのが役目であるということを表している。

「患者さんたちが元気になった姿を見て、退院する姿を見たときに嬉しいと思えるか否かでやっていられるかどうかで決められるというか。」「この人助かるんだろうかという人たちに全力で当たるじゃないですか。でもその人たちが数年後会ったときに社会復帰できていたりとか、感動がね。」「『死にたい』っていうほど重症の患者さんの手術が順調に終わったりした時とか。その後の患者さんの道筋が見えて来たり。そんな時にこの仕事の魅力を感じます。」

3) <患者と向き合えることが楽しいと思える>とは、新人時代を振り返り看護師としての自己の成長を感じると共に、自分らしい看護ができる喜びを感じている状態を表している。

「一般科にいたときは、なんていうかな、あの、患者さんと接していても忙しすぎちゃってほんと目をそらしたくなっちゃうような。精神科はじっくり付き合えるかなっていう、患者さんとお話したりとかほんとは大好きなので。そういうのができる。」「いろんなこと考えながらこうー、この人が元気になるのはどうしたらいいのかなって考える過程も好き。私はそういうのに魅力を感じてやっています。」「人間関係が普通の仕事よりも濃いというか、患者さんに対して。だからその分返ってくるものも大きい。」

4) <看護師として自立する>とは、看護師を継続した結果、自分なりの看護が行えるようになったことを表している。

「全然他人と喋らない患者さんで、その患者さんの唯一の趣味が将棋だったんですよ。それで僕も将棋を勉強して、僕には話してくれるようになった。時間かけて関わっていけば変わるんだとかそういう気持ちですね。」「患者さんが頑張ってることは

認めてあげたいから、ちょっと憂さ晴らし的な感じでも、なんか話してくれたら嬉しいな。」「患者さんがよくなっていけばそれはやっぱり患者さんが頑張った証拠だから、それは喜べるし。それが楽しいんですよ、一番は。』

5) <ロールモデルとの出会い>とは、自分の看護に影響を与えた上司や先輩の存在との出会いがあったことを表している。

「ICUの師長に言われたのが、ここだけ見ててもだめだよって。この人たちをどうやって家族が支えて、どうやって看護師が介入して歩けるようになっていったのかわからなきゃだめだっていわれて、『あ、そうか』と思って。その師長さんの言葉は響いたかもしれない。」「今の病院に入った時の病棟の師長には割と感銘を受けた。経験談を交えて僕が行き詰まったりした時に話してくれてたりしてたんで。経験からくる言葉なんで心の中にすっと入るし、こういう人になりたいなっていうのはありましたね。」「その先輩は患者さんへの対応がすごい親切なんですね。怒ったりもするんだけど、全然怖くないの。大好きになりました。』

5. [看護に社会人の経験を生かせる強み] とは、面白みを感じてきた看護師としての経験において、過去の社会人経験を看護に生かしているということを表している。<心を込めた対応は返ってくる>、<入院による患者の焦りが理解できる>、<接遇には困らなかった>、<対象との関わり方が分かった>の4つの概念から成り立っていた。

1) <心を込めた対応は返ってくる>とは、社会人経験で人と接する中で効果的だったコミュニケーション方法があり、それを看護にも生かしていることを表している。

「ひとつの言葉、心こめると返ってくる。そういうのが人と接するということを学んだという感じがあるので、患者さんにも意識はして接するようにはしています。」「割とカンファレンスで話題にあがるような癖のあるひとに私当たることが多いんですよ。でもそういう人の話とか聞いていくと、その人の寂しいところとか、強がって自分を守っているところとか見えてくる。』

2) <入院による患者の焦りが理解できる>とは、社会人経験があるからこそ患者の置かれている状況が理解できることを表している。

「患者さんは外の世界から来てるじゃないですか。そういうところの理解がよく分かるんです。自分の経験があるから、代わりはいるよって思うからそれはゆっくり療養っていつてる場合じゃないとか、

よく分かる。」「患者さんはすごいナーバスになっているので、ほんとに不用意な一言で。すごい、言葉の重みを感じますね。』

3) <接遇には困らなかった>とは、既に社会性が身についており、患者に不快な思いをさせずに看護が出来たことを表している。

「マナーとか接遇が身につくって、社会性というのかな、それがついた状態で患者さん対応ができていたのかな。失礼のない対応が身についたのかなと思ってます。」「病院経営もサービス業の一つだと思ってるんで、患者さんとの接し方もサービス業だった経験を生かして接したりすると、割とスムーズにいったりとかします。』

4) <対象との関わり方が分かった>とは、患者や家族の身になった対応ができるようになったことを表している。

「私だったら、って考えちゃうかな、患者さんに対して。看護師しか知らなくて看護師やっているのと、社会人を経験して看護師になるのってやっぱり違うと思うんです。効率良くやるっていう感覚が違うから。患者さんが何を必要としているのか。そのためにはどのくらいの時間が必要でっていう。」「患者さんってこう探ってくるんですね。だからほんとにすごく深く洞察しておかないと返答ひとつが傷つけてしまったりだとか。』

6. [看護師に転職したことへの自己肯定感] とは、社会人を経験した看護師が独り立ちして看護を行ない、その魅力ややりがい、面白さを感じ、後輩にも伝えたいと思うことを表している。<新人にも仕事を覚えやすい表現を工夫する>、<自分の経験を社会人経験者の指導に役立てる>、<患者への関心の寄せ方を教えることができる>、<後輩が育っていくのを見るのが嬉しいと思う>、<自分に新たな役割や意義を見つける>の5つの概念から成り立っていた。

1) <新人にも仕事を覚えやすい表現を工夫する>とは、今の若い看護師や配転者にわかるように指導を工夫していることを表している。

「今は若い子も一回は手術室に来るようになったから、ちゃんと知識を持って伝えてと。今まで言い伝えばかりみたいだったのを、自分の勘でだけやってたみたいなのを、今の若い子達はヴィジュアル化したほうが覚えやすいから、写真を撮ってマニュアルをつくったりしています。」「ある先生の講義を聞いた時に、自分の思っていることを伝えたいんなら、相手の頭がどう思っているか、相手の頭に飛び込んで、ちゃんと相手の気持ちになって教え



るんだってことを言われた。だから、相手の言葉を使って指導するようにしています。」

## 2) <自分の経験を社会人経験者の指導に役立てる>

とは、社会人を経験して看護師になった自分の経験を育成が難しいと言われる社会人経験のある看護師の育成に役立てていることを表している。

「今まで自立して仕事をして来た人たちだから。鼻が高いところもあるかもしれないけど、それはそれで生かしていければ。それでいいんじゃないかって思う。はじめは大変かもしれないけど、乗り越えちゃえば続きますからね。経験を積みれば、面白くなってくるし。」、「看護師としての結果って数字じゃ現れないじゃないですか。数字にならないところでやなこと面倒臭いこともあるけど、どれだけ患者さんのことを思って行動できるかということ。すぐに結果を求めないで。行動の評価もちゃんと見てくれている人は見てくれているので、患者にも伝わるんで。」、「ひとりにさせない。みんなちゃんと見守っているからねっていう安心感が伝わるようにしています。」

## 3) <患者への関心の寄せ方を教えることができる>

とは、患者によってはコミュニケーションが良好に取れない人もいるが、「なぜそうなんだろう」と理由を考えることが大事だと教えていることを表している。

「患者さんがひねくれ者だろうと、絶対、その人なりのひねくれている理由なり、可愛げがあるところもあると思うんで。そこを見つけてもらいたいな。そうすると、今なぜこの人はこんなにひねくれているだろう、きっとどこか痛いのかなとかそういう想像につながると思うので。」、「患者さんを好きになることかな。そうすれば自然に患者さんのための看護を考えるようになると思うんです。」

## 4) <後輩が育っていくのを見るのが嬉しいと思う>

とは、これまでの看護師生活の中で様々な思いをしたが、看護師を継続してきて後輩が育つことに喜びを感じていることを表している。

「自分の好きなことを黙々とやるけれど、下の子が育っていくのを見てるのも嫌ではないというのはあって。」、「後輩の指導は看護を楽しんでいると思ってもらえるというのと、あとは安全に患者さんのことが見れるということ。これを大事にしました。」

## 5) <自分に新たな役割や意義を見つける>

とは、新たな役割や病棟に必要なことを意識してスタッフに還元しようとする姿勢を表している。

「私は今年、緩和病棟における看護の研究をしようと思ってる。来年以降の転入者に教育プログラムじゃないけど、何か必要なものが浮かび上がればい

いと思って。今、院内の高齢者看護のエキスパートの勉強会に入って、それが終わったら病棟のスタッフに伝えていかないといけないという役割も担って、そういうのもやっていかなきゃなって思ってます。」、「自分のやりたいことを伝えながら、表立ってやるんじゃなくて、後輩にやらせる。患者さんから直接感謝を言われたりだとか、ありがたいと言われることは後輩が聞いて、そのベースを作るのが自分というスタンスに変えたいと思ってます。そうじゃないといつまでも後輩が成長しない。」

## Ⅸ. 考察

### 1. 看護師になったことによる心身の疲弊と仕事をする上での工夫

本研究において、社会人経験のある看護師は期待をもって入職したにも関わらず「看護師になったことによる心身の疲弊」を感じていた。Neugartenは「我々の身体および身体科学には、成長発達に伴って、思春期・更年期のような諸段階を生む予測可能な変化が起きる」<sup>15)</sup>と述べている。迫田らも、「社会人経験のある看護学生は年齢が上であるので、卒後について体力的に不安がある」<sup>16)</sup>と述べている。従って、社会人経験のある看護師にとって肉体的な苦痛は予測の範疇である。

しかし、社会人経験のある看護師は、肉体的な厳しさがある上に<年下の先輩から説明なき指導を受けた>、<男性看護師というだけで受け入れてもらえなかった>という体験をして、精神的な苦痛も生じていた。塚本らは「新人看護師は就職前から職場内の人間関係の成否を懸念し、就職後早期の段階ではそのことに強い不安を感じている。新人看護師は、就職後早期の段階から自分に対する他者の感情に関心を向けており、人間関係形成が重要な肯定的経験になりうる」<sup>17)</sup>と述べている。榊原らは社会人経験のある新人看護師がリアリティショックを感じる場面として「業務での戸惑い」と「同僚との関係のストレス」をあげている<sup>18)</sup>。つまり、人間関係形成が否定的経験にもなりうるともいえる。本研究においても、社会人経験のある看護師は一度社会人を経験してから、経済面や家族関係の調整をして取得した資格を生かしたい気持ちと、良好に人間関係を築くことが困難な職場環境の間で<看護師を辞めたいけど資格は生かしたい>という葛藤が見られた。期待をもち、転職して看護師としてのキャリアを歩みだした社会人経験のある看護師にとって、人間関係における困難さはネガティブな体験となり、看護師としての成長を阻害するリスクがある上、離職に至ることもあると考える。

清野らは「自己の感情をコントロールすることや、仕事以外には仕事のことを考えないようにするなど『気持ちを切り替えられる』ことは、看護師の精神的健康を維



持する上で重要な要素であり、看護師の職業を継続する上で必要な要素である。」<sup>19)</sup>と述べている。本研究でも社会人経験のある看護師は家族の支援を受ける、意図的に休日をとって趣味に没頭するなど仕事を忘れることのできる日を作るなどの工夫が見られた。<気分転換できる方法がある>ことは職業を継続するために必要な要素であり、有効な対処行動であると考えられる。

また、[看護師として仕事をする上での工夫]として、<なぜ転職して看護師になったのか内省(する)>して職業に臨む様子も見られた。檜垣は社会人経験のある看護師に対し、今後看護師としてのキャリアを積んでいく上で『『どうして転職して、なぜ看護師になったのか』『自分は何をやりたいのか』を明確にしておくことが必要である。人それぞれの理由や意味があるはずであり、そこをしっかりと内省することが、これから起こる様々な出来事を取り切り、看護師という職業にコミットする糧になる』<sup>20)</sup>と述べている。[看護師になったことによる心身の疲弊]を感じ、離職したい気持ちになった時に、そこで離職してしまう社会人経験のある看護師と、職業を継続できる看護師の差はいかに「なぜ看護師に転職したのか」を内省できるか否かによるところも大きいと考える。

## 2. 社会人の経験を看護に生かせる強みと看護師に転職した自己肯定感

清水は社会人経験のある新卒看護師は入職後、「年齢とキャリアのアンバランスから生じる困難」や、「新たな職業経験から生じる違和感」という今までの自分のやり方や考え方では通用しないという負の側面となる現象が生じるが、これらは「先輩や同期の配慮・先輩の仕事ができる姿を見ることでの尊敬」や、「職業経験を生かした割り切り」をすることで負の側面を打ち消していくと述べている。さらに、社会人経験のある新卒看護師には、「職業経験を生かした対応」や、「強みと弱みの自覚」によって自己の経験や特性を生かしながら職場適応に向かう過程を示唆している<sup>21)</sup>。

米田<sup>22)</sup>や西原ら<sup>23)</sup>の先行研究においても、社会人経験のある新人看護師がロールモデルとの出会いや、成功体験を重ねることによって自信をもっていくと述べている。バンデュラは自己効力感を上げるために必要な体験について、1つ目は成功体験であると述べている。人間は経験によって物事を判断するため、成功体験を多く積むことができれば自己効力感も上がる。逆に失敗体験をすると自己効力感が下がる。2つ目は代理体験で、自分と似たような境遇や似たような環境にいる人が成功しているのを見ると、自分にもできるという信念を持つことができ、自己効力感が上がるとしている<sup>24)</sup>。本研究でも、ロールモデルとの出会いや、成功体験の積み重ね

が看護師の成長につながるということが明らかになっている。社会人経験のある看護師が[看護師になったことによる心身の疲弊]を感じながらも職業を継続し、仕事を認められるように努力した結果、成功体験が積み重なる。そして、[患者との関わりを通して見えてきた看護の面白さ]を経験するようになる。それが、<心を込めた言葉は返ってくる>、<接遇には困らなかった>という社会人生活で培った「礼節や一般常識」を看護にいかすことである。人間関係の構築や接遇の基本が身についているので、患者や家族との関係を速やかに構築出来ると考える。

また、<入院による患者の焦りが理解できる>ことを強みとと思っていることも明らかになった。社会人経験のある看護師は、自身の経験から患者の病気だけでなく患者を取り巻く人や仕事など多角的な視点で患者を理解することが出来る。例として、「患者さんは外の世界から来てるじゃないですか。そういうところの理解がよく分かるんです。自分の経験があるから、代わりはいるよって思うからそれはゆっくり療養っていつる場合じゃないとか、よく分かる。」という語りがあった。看護師にとって対象理解ができることは強みである。対象理解が質の高い看護の提供につながる。社会人経験のない看護師と比べ、社会人経験のある看護師は彼らのそれまでに培った社会性から、患者が入院することが患者自身や家族にとって重大な出来事だということを「自分の社会人経験があるから」より深く理解することができる。

## 3. 社会人経験のある看護師の特徴

高野ら<sup>25)</sup>、長尾ら<sup>26)</sup>、西原ら<sup>27)</sup>の先行研究において、社会人経験のある看護師は自尊心が高く、他者からの否定的評価を恐れていることが明らかになっている。奥田は社会人経験のある看護師について「年下の先輩に対しては、『自己の前職の癖があるのではないか』、『柔軟に対応できない』など『年上であることの弊害』や、『社会人経験のない看護師と比べての劣等感』も感じていた」<sup>28)</sup>と年齢が上であることの劣等感があることを明らかにしている。本研究においても、[看護師になったことによる心身の疲弊]を感じていた時期の社会人経験のある看護師の語りは、主につらい体験で、時に他責的でもあった。それは、先行研究で既に明らかになっている「社会人経験は自分の方がある」という自尊心の高さであり、社会人経験のない看護師と比べて入職時の看護実践能力の低さに対する劣等感の表れだと考える。

しかし、職業を継続できた社会人経験のある看護師たちは<なぜ転職して看護師になったのか内省(する)>し、<気分転換できる方法(がある)>の利用という[看護師として仕事をする上での工夫]をして、<認めてもらえない悔しさを仕事で見返(す)>そうと職業を継続す

る努力をしていた。[看護師として仕事をする上での工夫]ができるのも[社会人の経験を看護に生かせる強み]があるからだと考える。先行研究では、『『今までの社会経験とは違う責任の中でも、看護職を継続し、やりがいを感じるように支援していく必要がある』、『社会人看護師が持つ強みを理解する』、『支援されている安心感を与える』』<sup>29)</sup>のように社会人経験のある看護師の受け入れ側に焦点が当たっていたが、当事者である社会人経験のある看護師たちがどのような努力をして、成長していくのかについての研究はされていなかった。本研究では、社会人経験のある看護師が[看護師になったことによる心身の疲弊]を乗り越えた後は、[社会人の経験を看護に生か(す)]しながら[患者との関わりを通して見えてきた看護の面白さ]を感じるようになり、看護師として成長していくことが明らかになった。[社会人の経験を看護に生かせる強み]を発揮できることが社会人経験のある看護師の特徴である。このことが[看護師に転職したことへの自己肯定感]につながり、社会人経験のある看護師が【社会人経験がある看護師としての意義の自覚】をする。このように職業継続の決意をするまでのプロセスを明らかにしたことで、社会人経験のある看護師の新人時代の支援を再考できると考える。

さらに、本研究において、社会人経験のある看護師の特徴として<自分の経験を社会人経験者の指導に役立て(る)>ている。社会人経験のある看護師は「今まで自立して仕事をしてきた人」と社会人経験のある新人看護師を位置づけ、「説明の仕方の工夫」、「看護師になるまでの経験の尊重」、「成長を待つ」、「みんなが見守っているという安心感を与える」ことに留意し、自分が受けたような指導を後輩にはしないよう心がけているという特徴を持つことが明らかになった。勝原は、「看護に“やりがい”や“いい職業”を予感させるのは、看護の仕事に自分なりの意味付けをし、何らかの価値を見出せる可能性を予感させるからだろう」と述べている<sup>30)</sup>。社会人経験のある看護師の語りに「今まで自立して仕事をして来た人たちだから。鼻が高いところもあるかもしれないけど、それはそれで生かしていければ。それでいいんじゃないかって思う。はじめは大変かもしれないけど、乗り越えちゃえば続きますからね。経験を積めれば、面白くなってくるし。」がある。これは社会人経験のある看護師が[看護師に転職したことへの自己肯定感]をもち、看護に“やりがい”を感じ“いい職業”だという思いに至り、同様の背景をもつ看護師の職業継続をサポートしている。これは、【社会人経験がある看護師としての意義の自覚】を行動化している一例だと考える。

#### 4. 看護職者のキャリア形成への示唆

社会人経験のある看護師を受け入れる側の環境を整え

る必要はもちろんのこと、当事者である社会人経験のある看護師自身も自分の強みを看護に生かせるような環境を積極的に整えることによって、看護職者として発達していくことができると考える。佐藤は「私はどう生きていくのか。そして、ある時期に看護職を選んだ私としてどう生きていくのか」<sup>31)</sup>を生涯問い続けることの必要性を述べている。社会人経験と看護師としての経験、そして、自己の人生経験は別物ではなく、生かすことで看護師としての能力が上がることに自信をもてるようになる。さらに、自己の人生も充実するという好循環が生まれる。

[看護師になったことによる心身の疲弊]の時期を乗り越えれば看護を面白い、転職してよかったと思うことができ、職業を継続できることが明らかになった。[看護師になったことによる心身の疲弊]を感じることは、その看護師にとって職業継続を阻害するリスクがある。「人を気遣い世話をすること」<sup>32)</sup>にやりがいを感じるができる環境を作ることが看護職者のキャリア形成につながると考える。

#### 5. 本研究の限界と今後の課題

本研究は社会人経験が1年以上あり、看護師として5年以上勤務している8名を対象とした。研究協力者の社会人経験は2～20年で、大きくばらついていた。看護師経験年数は7～21年であり、こちらもばらつきが大きかった。新人時代の記憶が曖昧になっている可能性がある。研究協力者の看護師経験年数を揃えた研究の必要性があると考えられる。

また、新人時代に離職してしまう社会人経験がある看護師と継続できる社会人経験のある看護師でどのような差があるのかも知る必要があると考える。例えば、社会人経験のある看護師の受け入れ体制の整備状況の違いは社会人経験のある看護師の職業継続に影響することが予測される。

#### X. 結論

1. 社会人経験のある看護師は[看護師として働くことへの期待]を持ち就職するが、肯定的な体験ばかりではなく、[看護師になったことによる心身の疲弊]を感じる。しかし、[看護師として仕事をする上での工夫]をして、職業を継続することによって[社会人の経験を看護に生かせる強み]を生かし、[患者との関わりを通して見えてきた看護の面白さ]を感じるができるようになる。そして、[看護師に転職したことへの自己肯定感]を持つという6つのカテゴリーから【社会人経験がある看護師としての意義の自覚】のコアカテゴリーに収束した。



2. [看護師になったことによる心身の疲弊]を感じながらも[看護師として仕事をする上での工夫]をして、職業を継続することによって[社会人の経験を看護に生かせる強み]を生かし、[患者との関わりを通して見えてきた看護の面白さ]を感じるプロセスは可逆的であり、プロセスの軌跡に要する時間も個人差がある。しかし、[看護師に転職したことへの自己肯定感]を持つことができた社会人経験のある看護師は、【社会人経験がある看護師としての意義の自覚】に至ることができる。それぞれのプロセスに時間がかかったとしても、これらの過程は看護師という新しい職業に適応する上で全て意味があるといえる。

## 謝辞

本研究にあたり、快くインタビューに答えてくださった8名の社会人経験のある看護師の皆さまに深く感謝申し上げます。

## 利益相反

本研究において、開示すべき利益相反は存在しない。

## 引用・参考文献

- 1) 厚生労働省：令和元年版 労働経済の分析 - 働き方の多様化に応じた人材育成の在り方について -、[https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage\\_06963.html](https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_06963.html)、2021年1月3日
- 2) 奥裕美：他分野の学士号を持つ看護学生が看護基礎教育機関を選択する際の影響要素、日本看護学会誌、34、292-300、(2014)
- 3) 総務省統計局：労働力調査（基本集計）2020年9月分結果（2020年10月30日公表）、<https://www.stat.go.jp/data/roudou/sokuhou/tsuki/index.html>、2021年1月2日
- 4) 厚生労働省：看護師等学校養成所入学状況及び卒業状況調査、(2020)、<https://www.mhlw.go.jp/toukei/list/100-1.html>、2021年1月2日
- 5) 厚生労働省：第7次看護職員需給見通しに関する検討会報告書、(2012)  
<https://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r985200000z68f-img/2r985200000z6df.pdf>、2020年11月23日
- 6) 厚生労働省：社会人経験者の受け入れ・支援のための指針、(2015)、<https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-10800000Iseikyoku/0000079680.pdf>、2020年11月23日
- 7) 厚生労働省：長期的看護職員需給の見通しの推計、(2019)、<https://www.mhlw.go.jp/content/10805000/000554603.pdf>、2020年11月22日
- 8) 日本看護協会広報部：「2016年病院実態調査」、(2017)、<https://www.nurse.or.jp/home/statistics/pdf/toukei01.pdf>、2020年11月22日
- 9) 寺岡葉子、森ゆかり、大屋紀子他：社会人経験を持つ新卒看護師の職場適応を促す関わり、淀川キリスト教病院学術雑誌、48-52、(2006)
- 10) 米田美智子：社会人経験を有する卒後3年目看護師の就労継続と思えた要因、神奈川県立保健福祉大学実践教育センター看護教育研究集録、39、201-208、(2014)
- 11) Patricia Benner, Judith Wrubel：The Primacy of Caring Stress and Coping in Health and Illness、(1984)、井部俊子：現象学的人間論と看護、P6-7、医学書院、東京
- 12) 真壁幸子、木下香織、古城幸子、職業5年以内の看護師の早期離職願望と仕事への行きづまり感、新見公立短期大学紀要、27、79-89、(2006)
- 13) 高野真由美：社会人経験のある新人看護師の困難感と取り組み、看護実践の科学、13、(5)、40-45、(2012)
- 14) 木下康仁：グラウンデッド・セオリー・アプローチ質的実証研究の再生、P180-183、弘文堂、東京、(1999)
- 15) Neugarten：B.L, Middle Age and Aging、A Reader in Social Psychology University of Chicago Press、173-180、(1968)
- 16) 迫田智子、梅田尚子、清水るみ子：社会人経験のある看護学生の就学上の困難と学業継続への対処、第44回日本看護学会論文集看護教育、321-324、(2014)
- 17) 塚本友栄、舟島なをみ：就職後早期に退職した新人看護師の経験に関する研究—就業を継続できた看護師の経験と比較を通して—、看護教育学研究、17(1)、22-35、(2008)
- 18) 榊原智幸、宮口瑞希、樽山博美他、社会人経験のある新人看護師が体験したリアリティショックを克服できた要因、日本看護学会論文集看護管理第44回、273-276、(2014)
- 19) 清野純子、森和代、井上真弓：看護師のレジリエンスに影響する要因の検討、ウーマンズヘルス学会誌、11、(1)、127-134、(2012)
- 20) 檜垣美香子、成田康子：社会人経験のある新人看護師とグループインタビューから考える支援体制、看護実践の科学、13、(5)、35-39、(2012)
- 21) 清水泰子、社会人経験のある看護学生の動向と卒後支援のあり方について、聖マリアンナ医科大学雑誌、41、13-17、(2013)
- 22) 前掲10)
- 23) 西原雄一、松田安弘、山下暢子：社会人経験を持つ



- 新人看護師の看護職継続過程における職業経験に関する研究、群馬県立健康科学大学紀要、10、89-107、(2015)
- 24) Albert Bandura : self-efficacy in changing societies, (1997)、本明寛,野口京子:激動社会の中の自己効力、P3-4、金子書房、東京
- 25) 長尾真由美、寺岡葉子、大屋紀子:社会人経験をもつ新卒看護師の職場適応を促す関わり,看護実践の科学、137、(35)、27-34、(2012)
- 26) 前掲13)
- 27) 前掲23)
- 28) 奥田映里子:社会人経験を持つ看護師の就労継続につながる要因—受けてきた新人看護師教育からの分析—、神奈川県立保健福祉大学実践教育センター看護研究収録集、39、177-184、(2014)
- 29) 前掲25)
- 30) 勝原裕美子 (2007)、看護師のキャリア論、ライフサポート社、P28,東京
- 31) 佐藤紀子:総論今考える「看護師のキャリア形成支援」、看護、38-41、(2012)
- 32) 前掲11)